家族の危機を乗り越え女性農業者として活躍
～女性でも一人で何でもできなきゃね！～

小牧市　堀尾咲子さん
作物（米・麦）、エビイモ

【平成 27 年９月 18 日掲載】

名古屋市近郊の小牧市において、地域特産のエビイモ生産と米麦の受託生産を行ってきた堀尾咲子さんをご紹介します。生活改善実行グループ（現 農村輝きネット）会長、農村生活アドバイザー愛知県理事、ＪＡ尾張中央理事など、役職の経験も豊富な女性農業者です。

結婚を機に農業に携わるように

堀尾咲子さん

咲子さんの実家も農業を営んでいたそうですが、24 歳で結婚し、本格的に農業に携わり始めました。結婚当時は施設野菜や花きを栽培していましたが、区画整理のため施設を壊すことになり、米麦の受託生産と地域特産のエビイモで生計を立てるようになります。米麦のオペレーターとして、多いときには大麦 15ha、水稲 10ha を受託していました。

希少価値の高いエビイモで所得安定へ

エビイモ（上段左から茎、親イモ、下段左から孫イモ、子イモ）

エビイモはサトイモの一種で、食感が柔らかくもっちりとし、煮崩れしないため煮込み料理で特に美味しいイモです。小牧市はかつてはエビイモの三大産地の一つに数えられるほどの生産量がありました。栽培には黒ボク土壌が適するため、小牧市の北里地区はエビイモ栽培に最適だったそうです。小牧市で栽培されたエビイモは、名古屋市中央卸売市場で相対取引され、高級料亭で利用されていました。栽培はすべて手作業で、一般的なサトイモの３倍の作業量が必要と言われたほど手のかかる品目でしたが、堀尾さん夫婦はエビイモを栽培品目に取り入れることにより、都市近郊農業における所得安定を図っていたそうです。

家族の危機と北海道での生産開始

そのような中、平成元年にご主人がガンを患い、咲子さんは、農業を続けるかどうかの決断をしなければならなくなりました。都市化の進む小牧市は、固定資産税が非常に高額なこともあり、生産面積を維持することが困難な地域です。それでも咲子さんは、「稲と会話しながら育てていく過程が好きだから、やっぱり農業を続けたい」と思い、「女性でも一人で何でもできるようにならなければならない」と実行に移しました。収支計算など経理は一手に引き受け、フォークリフトやトラクターの運転、水管理や肥料・農薬などの栽培技術も習得したそうです。

一方で、ご主人は病気になる以前から、小牧市で農業を続けることが厳しくなることを見越し、全国で農地を探していました。息子さんが農業大学校に就学していた平成７年頃に北海道の農地

を見つけ、卒業後に息子さんを農場長とした北海道での農業を開始しました。その後ご主人は、見事病気を克服し、小牧市と北海道での農業に携わります。咲子さんは、ご主人や息子さんの意見を調整しながらも背中を押し、二人を支えてきたそうです。

現在北海道の農場については、息子さん夫婦で 50ha の面積を管理し、小麦と加工用トウモロコシの契約栽培を行っており、順調に経営されています。

食育活動や女性農業者の組織設立にも尽力

様々なオリジナルレシピ

咲子さんは、女性農業者による生活改善実行グループに昭和 53 年から参加しており、そのグループ活動の中で、農産物を利用した料理や農家経営など、様々な内容について勉強しました。このとき勉強したことを活かし、農村生活アドバイザーやＪＡ女性部の活動を通して後輩に伝えるとともに、現在は各地で料理講師としても活躍しています。

オリジナルレシピがたくさんあり、「米粉の簡単蒸しケーキ」「牛乳パックで作るういろう」「エビイモぼたもち」など、生活改善実行グループで習ったことをもとに、自身で試作を繰り返し、レシピの改善を行ってきました。米粉や小麦粉、エビイモなどの食材は、自家や地域の生産物を使用し、地元農作物の消費拡大に貢献しています。

料理教室の様子

また、咲子さんは地域からの信頼も厚く、様々な役職を歴任されています。地域のＪＡ女性部の設立や、全国女性農業経営者会議の愛知県組織「愛知かきつばたの会」による愛知県大会開催にも携わりました。「愛知かきつばたの会」では平成 21 年に会長を務め、愛知県と岐阜県の共催で初めての勉強会を開催し、農林水産省や愛知県農林水産部の女性役職者を招くなど、新しい取組も積極的に推進してきました。

左から、ういろう、飾り寿司

飛び込んでやれば女性でも農業分野で活躍できる

研究会による掘り取り作業の様子

現在も農協理事や講師活動などで多忙な咲子さんですが、将来を見据え様々な準備もしています。エビイモは生産量が激減していましたが、２年前にご主人を中心に「エビ芋研究会」を立ち上げました。共同ほ場での栽培、地域のイベントでの販売、小学生への授業などを行い、伝承活動も進めています。昔は生活のために栽培していたエビイモも、今は待ってくれる人のために生産し、伝統行事や行事食を大切にしたいという思いの方が強くなっているそうです。

最後に、若い女性農業者にメッセージをお願いしたところ、「取り組む前から難しく考えないで、とにかく飛び込んでやってほしい。やってみればなんとかなる。」とお話しくださいました。ご主人が病に倒れたときも、女性の組織を作ったときも、自分がなんとかしなければならないと猛進されたそうです。すべての経験がつながって今の活躍があることを、体現されているなと感じました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2015, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.